

彫刻の調査と研究経過

美術工芸研究室・彫刻

一 俊乗房重源の研究

俊乗房重源が鎌倉時代における東大寺の復興造営を中心として、あるいは播磨の浄土寺、あるいは伊賀の新大仏寺、あるいは周防の阿弥陀寺その他の造営に力を尽した一代の傑僧であることは、いまさうい

鳥羽一念寺 阿弥陀如来像

うまでもないことであるが、重源がその生涯になし遂げた仕事の数々は、彼自らが書き記した「南無阿弥陀仏作善集」に詳細に伝えられているのみならず、その実際の仕事でいまになおその元のままの姿で遺されているものも決して少なくない。例えば、東大寺南大門とその二王像や、播磨浄土寺の浄土堂とその本尊の阿弥陀三尊像や、醍醐寺の宋版一切経や、周防阿弥陀寺の鉄宝塔とその内に納められた水晶五輪型舍利塔などはそのもつとも著しいものであろう。したがってこれ等に對する調査なり研究なりは、すでに早く昭和6、7年頃から東大寺の筒井英俊師と小林との協力ではじめられていたが、それはまた当研究所の開設と同時に小林を中心とする研究所の総合研究としてつづかれ、昭和28年度には文部省の科学研究費を補助されたこともあり、その後もずっと引続いて研究をおこなっている次第である。そして昭和34年においては、かつて東大寺浄土堂に安置されていたのが、その後いつか京都鳥羽の一念寺に移されたものと伝えられている丈六の阿弥陀如来像を調査し、また東大寺の俊乗房重源像の伝来を追って、かつての俊乗堂すなわちいまの行基堂の造営年次などを尋ね、さらにまた作善集などにも記されている周防の遠石、小松原（いまの松原）、末武（いまの花岡）の三八幡宮などを調査して、それぞれかなりの成果をおさめた。ことに一念寺の阿弥陀如来像は周丈六（実測像高7尺3寸5分）

の実に堂々としたもので、それがいわゆる藤原和様を追つて鎌倉初期あたりに造られたものであることはすぐわかるが、もしこれが寺伝のように東大寺浄土堂のものであれば、これはおそらく六条殿尼御前すなわち丹後局高階采子が後白河法皇(建久3年崩)の菩提を弔うために造つたものとしてまず間違いないものと思われ、重源関係資料としてきわめて貴重なものになるわけである。

二 興正菩薩叡尊の研究

興正菩薩叡尊の研究も、当研究所としては昭和30年度における西大寺に対する総合研究の一部としてすではじめられ、その最初の基礎調査の成果として同年度に発行された「西大寺叡尊伝記集成」があることは周知の通りである。しかし叡尊が鎌倉中期頃に西大寺を中心として活躍した業績のほどは、地域的にもかなりひろく、またその関係寺院その他の数もきわめて多数に上り、あまつさえそれらの寺院などには必ずといつてよいくらい叡尊関係の資料を何かと伝えているのであるから、これ等をすつかり調べ上げるといふことはなかなか容易な業ではない。したがつてこの研究は昭和30年以來ずつと続けておこなわれているとはいふものの、まだその半ばにも達していないといつてよいだろう。しかし昭和34年度においては、やはり西大寺を中心として、前にその一部を整理した本堂の文殊菩薩像の納入文書ことにその大般若經の奥書をすつかり調べ、また西大寺文書の調査をはじめた。そしてまた関係寺院の大蔵寺の地藏菩薩像や、西方寺の薬師如来像や、金峯山寺の聖徳太子像や、円成寺の南無仏太子像や、海竜王寺の愛染

明王像等の調査並びに研究をおこない、さらに遠く尾道浄土寺の聖徳太子像や浄土寺文書の調査を実施した。なお偶然の機会から叡尊ゆかりの仏師善慶の造つた薬師如来像が淡路島の正福寺で発見されたことは喜ばしい限りである。

三 藤原彫刻の研究

藤原彫刻の研究は、昭和31年度における文部省の科学研究費による小林の「和様彫刻の形成とその伝播」という研究によつてはじめてられたものであるが、周知のように藤原彫刻はその作例の数もきわめて多く、また研究しなければならぬ諸要素もかなり多岐に互つていのであるから、これ等を一応整理するだけでもなかなか容易でない。そこでこの研究ではとにかくその造立の年次とか由緒とかがたしかめられるものを主として、それ等に関係があると思われるものだけをとり上げることにした。それでもなかなか大変で、ここ数年の間によく次のようなものの基礎調査だけを終つた。すなわち仏師定朝によつて完成されたといわれる和様彫刻の頂点を一応、通説のように平等院鳳凰堂の阿弥陀如来像とその供養菩薩像群として、こうした和様彫刻ができるまでの経過をたどる作例として

広隆寺講堂阿弥陀如来像、仁和寺金堂阿弥陀三尊像、醍醐寺薬師堂薬師三尊像、岩船寺阿弥陀如来像、六波羅蜜寺本堂薬師如来像、同十一面観音像、新薬師寺准胝観音像、善水寺薬師如来及両脇侍像、興福寺薬師如来像、六波羅蜜寺本堂地藏菩薩像等

をとりあげ、また和様の完成とその後の伝播とを尋ねることができ

ものとして

広隆寺十二神将像、靈山寺薬師三尊像、興善寺釈迦如来及薬師如来像、浄瑠璃寺本堂九躰阿弥陀像、同毘沙門天像（四天王の中）、興善寺大日如来像、法界寺阿弥陀堂阿弥陀如来像、法金剛院本堂阿弥陀如来像、善明寺阿弥陀如来像、安楽寿院阿弥陀如来像、大日寺五智如来像、大原来迎院薬師如来、阿弥陀如来及釈迦如来像、長岳寺阿弥陀三尊像、福寿寺千手観音像、湯川阿弥陀堂本尊像、円成寺本堂阿弥陀如来像等

を、そしてなお藤原後期でありながらもまだ前期の要素を多分に伝えているものとして

融念寺聖観音像、鞍馬寺吉祥天像、醍醐寺薬師堂吉祥天、閻魔天及帝釈天像等

をとりあげて、これ等の各像についてかなり詳しく調査もし、またきわめて精密な写真などを撮影した。

四 鎌倉時代における院派仏師の研究

——日本彫刻作家研究の中——

院派仏師とは、名匠定朝にはじまる専門仏師の中でそのもつとも正しい嫡系をなすもの、すなわち定朝、覚助、院助、院覚、院尊と伝えられた系統のものを指すわけで、鎌倉時代の初頭においては院尊、院実、院承、院賢等の名がかなりよく知られている。しかしどうしたところか、この院派仏師の鎌倉時代における活躍のほどは、後に述べるようにその現存作例もかなり数多く遺されていないながら、それ等の各作者

彫刻の調査と研究経過

のことがあまりよくわかっていない。ことにそれ等各作者の師弟関係その他の仏師としての立場といったようなことがほとんど明らかにされていない。そこでこの研究においては、むしろその現存作例に重点をおいて、それ等の彫刻としての様式や手法などの上から、その相互関係を明らかにして、いわゆる院派仏師の歴史をたどってみたいと思ふ。いま知られている院派仏師の現存作例の主なるものは

東大寺及手向山神社舞楽散手面—承元元年（一一〇七）院賢作
京都宝積寺十一面観音像—天福元年（一一三三）院範作
京都仁和寺悉達太子像—建長四年（一一五二）院智作
滋賀求法寺慈恵大師像—文永四年（一一六七）院農作
奈良達磨寺聖徳太子像—建治三年（一一七七）院恵、院道作
滋賀高野神社慈恵大師像—弘安六年（一一八三）院信作

十一面観音像 法金剛院

滋賀金剛輪寺慈恵大師像二軀—弘安九年(三六六) 正応元年(三六八) 蓮妙作
 高野山常喜院地藏菩薩像—永仁二年(二九四) 院修、院湛、院唱、院亮作
 熊本青蓮寺阿彌陀三尊像—永仁三年(二九五) 院玄作
 伊勢外宮伝来妙見菩薩像—正安三年(三〇一) 院命作
 京都神護寺浮彫弘法大師像—正安四年(三〇二) 定喜作
 尾道浄土寺聖徳太子像—乾元二年(一三〇三) 院憲作
 京都法金剛院十一面観音像—元応元年(三一九) 院湛、院吉、院聖等作
 鎌倉覚園寺阿彌三尊像—元亨二年(一三二二) 院興作
 高知金剛頂寺浮彫真言八祖像—嘉暦二年(一三二七) 定審作
 愛媛大山祇神社大日如来像—元徳二年(一三三〇) 院吉作
 の如くであるが、昭和34年度においては、この中で求法寺と達磨寺と
 金剛輪寺と常喜院と法金剛院との各像を調査した。この中で法金剛院
 の十一面観音像の如きは、これ等がすべてその造像にたずさわつたも
 のかどうかわからないが、とにかくその納入文書の中に仏師とし
 て院湛、院吉、院聖、院保、院蔵、院救、慶賢、院即、
 院舜、院存、快夷、院鑿、澄審、定憲等の名が見出されて、この研究
 に一つの大きな光明を与えてくれた。

五 能楽発達期(室町—江戸初期)における能狂言面の研究

わが国の伝統芸術に対する一般の関心は近来とみに高まつてきたが、
 ことに能楽についてはその文学史的問題はもとよりのこと、それに
 用いられる能面や能衣裳やその他の小道具などにも注意を向けるもの
 がひじょうに多くなつてきたようである。当研究所に於てもそのはじ
 めはまことに偶然な機会から奈良の山間にある小さな神社からいくつ
 かの古い能面を発見したが、そんなことが幾度か度重なつて、従来あ

まり世に知られていなかったものでしかも室町時代のものとして間違
 いないと思われる古い能面がかなり数多く知られるようになったわけ
 である。それ等の中で、とくにこの研究によつて見出されたものを表
 示してみると次の通りである。

- 応永二十年(四三三) 奈良豆比古神社懸見面—千草左衛門大夫作(銘)
- 奈良豆比古神社翁面、黒色尉面、尉面等
- 永享二年(四四〇) 吉野天川社黒色尉面—十二又五郎(銘)
- 吉野天川社翁面—十二(銘)
- 宇陀海神社翁面—十二(銘)
- 明応二年(四四三) 吉野勝手神社若い男面、若い女面—七郎作(銘)
- 天文(四五三—四五五)頃 柳生長尾神社翁面、尉面、延命冠者面等
- 永祿五年(四五六)以前 宇陀海神社父尉面、黒色尉面、延命冠者面、飛出面、
 若い男面、怪土面等(面箱銘)
- 天正二年(四七四) 吉野天川社翁面—おちのきたらう作(銘)
- 天正六年(四七九)頃 多武峯談山神社若い女面(面箱銘)
- 天正十九年(四九二) 吉野天川社猩猩々面—ヤマタ□キヒヤウエ作(銘)
- 柳生水間八幡神社飛出面—喜兵作(銘)
- 柳生水間八幡神社若い男面、若い女面、延命冠者面、尉
 面、翁面、父尉面、黒色尉面
- 寛永五年(六三六) 吉野天川社若い女面—秀能井時守(銘)

これ等は能面史の上にもことに貴重な資料となるもので、従来
 の能面史の考え方に大きな変化をもたらすのではないかと思われ
 る。したがつてこの研究に於ては奈良地方にまだ残されていると考
 えられる古い能面を尋ね出すと共に、また近江路や北陸道や山陽道
 あたりの神社にも調査の手を指し伸べたいと思つてゐる。

六 印 仏 の 研 究

—元興寺極楽坊の庶民信仰資料研究の一部として—

能 面 尉面—阿古父尉カ
長 尾 神 杜

の時期であるが、いままでに調査した主なものは次の通りである。

- 阿弥陀如来印仏 (浄瑠璃寺九躰阿弥陀像納入)
- 毘沙門天印仏 (旧中川寺毘沙門天像納入)
- 十一面観音印仏 (福寿寺千手観音像納入)
- 阿弥陀如来印仏 (遣迎院阿弥陀如来像納入)
- 弥勒仏印仏 (興福寺北円堂弥勒仏像納入)
- 吉祥天印仏 (浄瑠璃寺吉祥天像納入)
- 如意輪観音印仏 (元興寺極楽坊伝来)
- 千手観音印仏 (興福寺食堂千手観音像納入)
- 毘沙門天印仏 (興福寺食堂千手観音像納入)
- 聖徳太子印仏 (元興寺極楽坊聖徳太子像納入)
- 十一面観音印仏 (法金剛院十一面観音像納入)
- 愛染明王印仏 (元興寺極楽坊弘法太子像納入)

これ等は多くその造像の勸進などに利用されたようであるが、その利用の仕方が時代により、また寺によつてそれぞれかなり異つたものがある。これがわかるのも興味をひく。それにしても、これはやはり仏を造るという作善を、一人でも多くの人に浴さしめようとした仏家の善意から出ているように考えられて、この印仏もなかなかおもしろい研究の対象であると思う。

七 淡路島の文化財調査

昭和34年の5月27日から30日までと、8月20日から23日までの計8日間に、洲本市にある淡路信用金庫美術館の要請によつて淡路島全島の文化財を調査した。これはこれまでとかく見棄てられ勝ちであつた淡路島にも何か文化財があるのではないかということ調べると共に、

印仏とはまた摺仏ともいわれ、紙にいろいろな仏の姿を木版で印刷したもので、それには一紙に単独の仏菩薩をあらわしたのもや、また同じ姿のものを多数並べたものなどがあつて、その形式は多種多様である。この印仏がはたしてどんな意味をもつたものであるかということとは、いままでにもこれを論究したものがないことはないが、どうもあまりはつきりとした結論を出していないように思われる。そこで元興寺極楽坊における庶民信仰資料の研究をきっかけとして、たまたま同寺にかなり多数の印仏が伝えられていたのを中心として、その伝来その他の出緒の正しいもの、例えば仏像の像内に納入されていたものなどを、できるだけ数多く調べて、それ等がそれぞれどんな意味合いをもつて造られたものであるかを尋ねて、そのほんとうの意義や性格などをも研究したいと思つている。現在はまたその資料集収

いままであまり文化財などに関心のなかつた島内の人達にこの調査をきつかけとしてすこしも文化財に対する認識を深めてもらうために、とくに美術館の方で企画されたものであった。

したがつてこの調査の実施もほとんど美術館の計画した通りにおこなつたのであるが、それはこの調査のもともとの主旨からして島内を隅なく廻るといふのであつたから、ところによつてはあまりじゆうぶんな調査をするいとまもなかつたわけである。しかしほぼ次に掲げるようなかなりすぐれた文化財の数々に接することができた。すなわち

- 千光寺(洲本市) 銅鐘(弘安六年銘) 鉄宝塔残欠(文保二年銘)
 満泉寺(洲本市) 金鼓(天文十五年銘) 千手観音像(室町時代)
 東山寺(津名町) 薬師如来像(平安初期) 十二神将像(藤原時代)
 金鼓(正平三年銘)

不 動 明 王 像 竜宝寺

成楽寺(北淡町) 大日如来像(藤原時代)
 岩上神社(二宮町) 金鼓(応安三年銘)
 妙京寺(二宮町) 金鼓(永享十二年銘)
 浄土寺(一宮町) 石造宝篋印塔(鎌倉時代)
 竜宝寺(一宮町) 不動明王像(平安初期)
 河上神社(五色町) 神像八軀(藤原前期—室町時代)
 河内神社(五色町) 銅鐘(永和五年銘)
 鳥飼八幡宮(五色町) 大般若経(天福元年奥書)
 日光寺(西淡町) 銅鐸
 大和神社(三原町) 大和社鉄印(平安初期)
 賢光寺(三原町) 銅造経筒(鎌倉時代)
 国分寺(三原町) 釈迦如来像(暦応三年仏師命門作銘) 飛天像残欠(藤原時代)
 成相寺(三原町) 薬師如来像(平安初期) 成相寺伽藍絵図(室町時代)
 護国寺(南淡町) 大日如来像(藤原時代) 古文書(鎌倉室町時代)
 福良八幡神社(南淡町) 神像六軀(鎌倉室町時代)
 正福寺(南淡町) 薬師如来像(建長元年仏師善慶作銘)

の如くである。ことにこの中の竜宝寺の不動明王像は近世の粗悪な修補によつて見た目をひどくしているが、元来はまことに古様を伝えた本格的な像で、またなかなかすばらしい造型をなすものである。平安初期のものとして間違いないものであろう。また正福寺の薬師如来像は建長元年(一二四九)に仏師善慶によつて造られたもの銘をもつもので、もつぱら西大寺叡尊に用いられた仏師善慶の作例がこんなところに在るのはちよつと奇異にも思われるが、この像の様式や手法などはたしかに鎌倉中期頃の写実を主としたもので、またかなりすぐれたものである。これ等はこの調査のもつとも大きな収穫といえよう。

(小林 剛)